

連載：研究者になる！－第65回－

医学部附属病院 麻酔科・助教 加藤 果林

●思い描いた将来は医師かバレリーナ

私が中学生の頃まで選択肢として考えていた職業は、医師かバレリーナでした。昔の私は体が弱く、長期間学校を休んだり、体育の組体操やマラソン大会に参加できなかったり……。病院にかかることが多い子どもでした。それに加え、京大の事務員を務めながら家事もこなす母に、家庭をもつ女性が働くことの大変さを聞かされ「ならば確実な資格をとろう。それなら医師だ」と。小学2年生の時には、漠然とそう考えていたように思います。

一方で、その頃から双子の姉妹の影響でバレエを習い始めました。体を動かすことも好きだったんです。そのうちバレエだけでなく、ジャズダンスやエアロビクスなどあらゆるダンスを習いました。とにかく踊ることが好きで、バレリーナになるという将来像を思い描くのも自然なことでした。しかし中学生の時、進路相談で「長く続けられる職業の方がいいのでは」と言われ、第一線で活躍し続けられる医学の道に進むことを決めました。

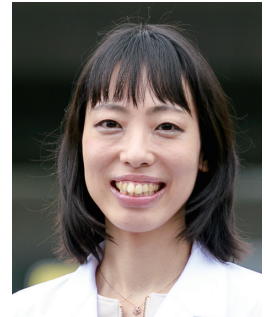


●研修先で見つけた運命の進路

京大医学部に進学するのは、今も昔も変わらず男子が8割・女子が2割。男子は灘や東大寺などの進学校がありますが、女子は高校の段階でそこまでの教育を受けられるところが少なく、高校受験の際は進路を決めるのにすごく悩みました。結局、選んだのは通学時間が短く勉強に支障が出ない京都の公立高校。週5日でバレエを続けながら、当時はペンを握る指の皮がめくれるほど勉強しました。大学時代は社交ダンスサークルに入って、ショーのダンサーをしたり某劇団のオーディションを受けたり。医学部の勉強は大変でしたが、そういったことができるのも最後の機会だと思い、いろいろと挑戦していました。

そしてやがて迎えた臨床研修。私たちの時代から、臨床研修期間に複数の科を経験するスーパーローテーション方式が導入され、マッチング制度によって研修先を自由に選べるようになりました。決まった研修先は西神戸医療センター。ここで私は、麻酔についてなら何時間でも話せる！というほど、麻酔科のやりがいに目覚めました。

麻酔科の業務は大別して、手術室での麻酔、重篤患者の呼吸・循環などを保つICU、痛みを取り除くペインクリニックの三つです。手術時には知識と技術と薬剤を駆使して片肺だけを換気したり、一部の神経をブロックしたり、全身麻酔だけでなく下半身麻酔を施行したりします。また緊急時には手術室の司令塔としてチームをまとめます。いつどの科に呼ばれるかわからない上、呼吸のこと、循環のこと、脳神経のこと、薬剤のこと……全部を理解していないとできない。麻酔科医は、職人であり救命のスペシャリストだと思いました。



●麻酔科医の現状と女性の働き方

そんな大好きな麻酔科なのですが、慢性的に人手不足なのが実情です。その要因は科としての歴史が浅く認知度が低いこと。手術室外での鎮静依頼を受けるなど多方面でニーズが高まったこと。そして高齢化社会を迎え、3人に1人が悪性腫瘍を患う今、治療の第一選択である手術の数が増加していることなどでしょうか。医学系大学の柱は教育・研究・臨床。私の研究テーマは周術期における感染症制御なのですが、臨床や子育てで限られた時間しかない今、できることを常に心がけています。その一つが「手指衛生の声かけリーダー」。周術時の手指衛生を徹底するという簡単なことで、感染症のリスクは大幅に下がるということを示したいと思っています。

麻酔科は比較的女性の比率が高い科です。オンオフがはっきりしているのも、9時5時で帰ることもできるし、扱う薬剤がシンプルなので、病院が変わっても働きやすい一方で、専門医制度が厳しいため長期の産休育休をとることが難しく、人手不足のため小さな子どもがいても当直を望まれることもあります。手指衛生の声かけ運動のように、今後、少しずつ意識を変えていきたいですね。

編集後記

センターの会議室から医学部構内を望んだものです。奥に小さく大文字が見えるでしょうか。大文字の送り火の日、大学は休みですが、結構特等席かもしれません！



Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橘町
 電話 075 (753) 2437
 FAX 075 (753) 2436
 E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
 HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>